

マタイによる福音書 13章1節～23節

マタイ福音書のほぼ真ん中、13章には、「種を蒔く人」から「天の国のことを学んだ学者」まで八つの譬え話が収められています。全体として「天の国」が主題になっています。私たちは、それら八つの譬え話をしっかり聞いて、悔い改め（マタイ3:2、13:15）、その真意を悟るよう求められています。

私たちが織り成された譬え話「天の国」集を聞いて悟る秘訣は、それらを語っているお方、つまり、説教されている主イエス・キリストご自身にあります。

言い換えれば、マタイ福音書13章には、主イエス・キリストはどんなお方であるのか、また、何を為されるお方なのか、が指し示されています。八つの譬え話を通して、この世に福音をもたらされるお方、主イエス・キリストと、その福音の中身が告げ知らされているのです。

マタイ福音書 13:1-3——

- 1 その日、イエスは家を出て、湖のほとりに座っておられた。2 すると、大勢の群衆がそばに集まって来たので、イエスは舟に乗って腰を下ろされた。群衆は皆岸辺に立っていた。
- 3 イエスはたとえを用いて彼らに多くのことを語られた。

主日のひな型とも言える「その日」、突如、ガリラヤ湖畔に「教会」が現出しました。これから、青天井の教会で礼拝が始まります。

主イエスが、御声の響きわたる最高の舞台を整えられました。

エフェソの信徒への手紙 1:23——

教会はキリストの体であり、すべてにおいてすべてを満たしている方の満ちておられる場です。

私たちは、この青天井の「湖畔教会」を通して、教会とは「キリストの体」であり、宇宙全体の拡がりの中にある「一つなる教会」(公同の教会)であることを覚えたいと思います。私たちは普段、各個教会において礼拝し奉仕していますが、全世界の教会が協同して天の国をめざして前進しているのです。この主イエスが中心におられる青天井のスケールの大きな教会の姿のうちに、すなわち、自然と人々とに囲まれ、そこから全世界へと道が走っている湖畔教会のうちに、私たち、枝葉の教会がつらなっている見えざる「一つなる教会」、来るべき神の全き支配に匹敵するような普遍的な教会があらわされています。

主イエスは、「すべての民」への伝道（マタイ 28:19）を象徴するかのように、群衆をそばに招かれます。そして主イエスは、適当な場所を譲るかのように、集って来た群衆を岸辺に立たせました。ご自分は湖上に出て行かれました。

さて、湖畔の教会では、一体、何があったのでしょうか？

何一つさえぎるものなく、群衆の視線は、舟の上の主イエスに注がれます。主イエスは舟に「乗って腰を下ろされ」ました。そうして、主イエスの説教が始まりました。

教会の礼拝の中心は、説教である——主イエスは、譬えを用いて話されました。その話は、深い内容があり、形式が整えられ、その核に福音が昭示されていますから、私たちは、それが説教であると、紛（まが）う方なく受け止められます。実は、今回が1回目（種を蒔く人の譬え）で、すぐ後に2回目の説教（毒麦の譬え）が行われています。

主の日が来る度に、私たちの教会では、先の主の日と同じように、説教が為されます。それは、主イエスが湖畔教会で行われた連続説教に由来していることではないでしょうか。ここで、主イエスの御言葉、その充実した日毎の糧の内容が察知できる〈御言葉のサンドウィッチ構造〉を表示しておきましょう。

マタイ福音書 13:1-23

┌13:1-9

| 種を蒔く人の譬え①……キリスト論。キリスト集中。

└ 13:10-17

| 譬えを用いて話す理由②……教会論・弟子道・伝道論。

└13:18-23

種を蒔く人の譬えの説明③……主イエス・キリストの約束・宣言。

外側のパン①から③へという展開を通して、主イエス・キリストの説教が組み立てられています。

真ん中の②では、「頑迷（がんめい）預言」などによって伝道の困難が提示されています。

伝道の困難（②）を克服するには、何よりも御言葉（①③）を聞くことが重要であると教えられます。

マタイ 13:1-23（種を蒔く人の譬え）とマタイ 13:24-43（毒麦の譬え）の連続説教において、外側の①が説教・本体（本論である譬えそのもの：群衆に対して）であり、また、外側の③が説教・説き明かし（譬えの説明：弟子たちに対して）である点は共通しています。

もう一度、1回目の説教の始まりに戻りましょう。

一見、不安定な場所とも思われるのですが、主イエスは、湖の舟に腰を下ろされました。「座っておられた」（マタイ 13:1）または「腰を下ろされた」（13:2）と、二度繰り返された行為は、主イエスが人間の間に宿られ、ご自分が人間の生活の中心におられることを開示しています。主イエスは、主に従う者たちに、神の国へめざしてこの地上の旅を続けるために必要な糧を分かち与える時にもまた――

マタイ福音書 26:20 過越の食事をする――

夕方になると、イエスは十二人と一緒に食事の席に着かれた。

こうして、人と共に「座った」主から弟子たちに、パンと杯が差し出されました。主イエスが私たちの間に根を張るまでに、どっしりと座し、寄り添ってくださるのは、幸いなことです。

すでに確認した通り、その日、出入り自由の湖畔教会〈特別伝道集会〉で為されたのは、説教でした。説教が、群衆の足を釘付けにする上よりの力でした。

マタイ福音書 13:9――

「耳のある者は聞きなさい。」

主イエスが語られ、人が聞く――そこに、主と私たちの関係がつくられ、教会が生まれます。いやいやながら義務として、ぼんやりと聞くのか、あるいは、主の命令として、はっきりと聞くのか、が問われています。

そこで、私たちは「耳のある者」として主に向き合う姿勢を整えます。その準備とは、私たちが何かの業を為すことではなく、主を知る、すなわち、〈主を受け入れる〉という一点に集中することです。

種を蒔く譬えを話される主イエス・キリストを知るための格好の〈神の啓示〉が、ヨハネ福音書 12:24 に出ています。

「はっきり言うておく。一粒の麦は、地に落ちて死ななければ、一粒のままである。だが、死ねば、多くの実を結ぶ。」

一粒の麦が畑に蒔かれると、死んで、そこで芽が出て、穂がつき、実を結びます。これは、主イエスが十字架につけられることによって、救いの実が結ばれるという〈十字架と復活〉

を指し示しています。世のりっぱな人物に比べ、「一粒の麦」のように、みすばらしく取るに足らないように見える（かもしれない）主イエス・キリストこそが、永遠の命という最高の実りをもたらされるのです。

イザヤ書 6:13——

なお、そこに十分の一が残るが

それも焼き尽くされる。

切り倒されたテレピンの木、櫨の木のように。

しかし、それでも切り株が残る。

その切り株とは聖なる種子である。

イザヤ書6章は、イザヤの召命〈伝道への派遣命令〉から、次に、民に対する頑迷預言〈伝道の困難〉、そして最後に、切り株〈伝道の伸張〉へと展開されています。

主なる神は、伝道の困難を見据えた上で、イザヤの汚れた唇を潔め、神の言葉の宣教者として派遣されました。その際、イザヤが最後まで心に刻まなければならないのは、奇(くず)しき「木の切り株」を土台とする〈伝道の伸張〉です。

主なる神は、人の罪科によって「良い土地」が荒(あ)れ廃(すた)れさせられたとしても、そこに、「切り株」を残されます。驚くべきことに、その木の切り株には「聖なる種子」が宿っています。

このイザヤの召命預言の中にあらわされた「聖なる種子」は、まさしく「一粒の麦」である主イエス・キリストではないでしょうか。

日本においては今のところ、教会は少数派であり、神の憐れみにより残された「切り株」です。しかし、主なる神は、その教会を「残りの民」として守るべく、主イエス・キリストを遣わし、つまり、地に「聖なる種子」と落とされ、「教会」の基とならせ給いました。日本の教会もまた、キリストの先行する恵みによって「良い土地」に根付かされています。私たちは、せっかく蒔いた種を鳥についばまれたり、茨にふさがれたり、また、石地に変わり果てたりする危うさに取り巻かれています。しかしながら、キリストの体である教会には、主イエス・キリストを通して、真に「良い土地」である天の国をめざす力が注ぎ続けられています。

それでは、そのような主イエス・キリストが語られた種を蒔く人の譬えに耳を傾けましょう。

マタイ福音書 13:3-9——

3 「種を蒔く人が種蒔きに出て行った。4 蒔いている間に、ある種は道端に落ち、鳥が来て食べてしまった。5 ほかの種は、石だらけで土の少ない所に落ち、そこは土が浅いので

すぐ芽を出した。6 しかし、日が昇ると焼けて、根がないために枯れてしまった。7 ほかの種は茨の間に落ち、茨が伸びてそれをふさいでしまった。8 ところが、ほかの種は、良い土地に落ち、実を結んで、あるものは百倍、あるものは六十倍、あるものは三十倍にもなった。9 耳のある者は聞きなさい。」

種の蒔かれた土地、四種類が提示されています。

私たちが問うべきことの第一は、自分はどの土地を選ぼうか、すなわち、自分はどのような土地になっていくのか、ということではありません。「自分は、種を蒔く人の譬えを聞いたので、四種類の土地の観点から自分の教会や信徒の日常生活を評価・分析しましょう」というような人間の賢(さか)しらさを、神は喜ばれません。

そうではなく、まず、語られている主イエス・キリストに出会い、しっかりとその御言葉に耳を傾けること、そして、三通りの〈悪魔の支配する荒れ野〉が散在する中、つまり、苦難のただ中で、主イエスは私たちをどこへ導こうとされているのか、を問い尋ねることです。そして、私たちが、苦難の待ち受けていることを見据えた上で、主イエス・キリストの絶大な招きの力に應えていこうと決心するのです。

父なる神は、「一粒の麦」として御子を、この地上で最も荒れた地であるベツレヘムの飼葉桶また十字架の丘へ下らせるほどに、地の民である私たちを愛してくださいました。そこには、「十字架の丘に罪の重荷と汚れを葬り去れ!」、そして、「御子、イエス・キリストと共に、これからは良い土地に生きよ! 神の国をめざせ!」との、私たちへの神の大いなるメッセージが込められています。

神の御子が種を蒔くと同時に、私たちが働き人として用いられ、種を蒔くのです。そこで、練達した伝道者として、開墾する土地に四種類のものがあることをわきまえ知っておくことは大切です。そのようにして、まさに、湖畔教会で聞いた説教が、伝道の力となっていくのです。

最後のまとめになりますが、マタイ福音書 13 章の譬え話「天の国」集を聞いて悟るとは、一体、どういうことでしょうか?

それは、一言でいえば、私たちの知恵や経験からその話の真意を捉えるというのではなく、それを語っておられる主イエス・キリストの愛に私たちが捕らえられる(フィリピ 3:12、Ⅱコリント 5:14)ということです。そこで大切なことは、私たちが、ただ主の前にひれ伏すことです。

主イエス・キリストは、「天の国」の喜びを私たちのもとにもたらすために、大いなる愛をもって、父なる神の計画である御業〈十字架と復活〉を成し遂げてくださいました。主イエスは、つかの間の人間の愛情をもってしては途中で挫折するであろうような苦難を耐え抜き、私たちを愛し抜いてくださいました。

深い霊性を欠いては望みようのない「天の国」ですが、主イエス・キリストは、神の愛と

義の全うされた〈十字架と復活〉の出来事によって「天の国」の到来を私たちに鮮やかに告知してくださいました。私たちを「良い土地」を耕す僕(しもべ)または教会として招き、用いてくださり、そして、「天の国」の窓を開いてくださったのです。

福音としてまず第一に、「天の国は近づいた」(マタイ 3:2)と告知された通りです。